仙台教区報

発行所　カトリック仙台教区事務所
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二二-22-七三七一番
編集・発行人　三浦　平三

仙台教区に七年ぶりの慶事

盛岡で　板垣新司祭　叙階される

教区をあげて祈りのうちに待ち望んだ叙階式が、3月20日午前11時より盛岡四ツ家教会において、教区長佐藤千敬司教の司式で盛大に行われ、板垣勤司祭、佐藤修助祭がそれぞれめでたく誕生した。仙台教区での司祭叙階は七年ぶり、盛岡での叙階式は実に十年ぶりの慶事であった。春分の当日は小雪まじりの悪天候にもかかわらず、市内県内はいうまでもなく、教区各地から司祭、修道女、信徒ら約六百人が聖堂に溢れた。

簡潔明瞭な叙階儀式

定刻、入祭のうたの中を約50人の共同司式司祭団を先頭に、受階者は司教と共に入堂、みことばの祭儀のあと叙階の儀、日本語典文が用いられるようになって、参加者にもよく理解できるようになった。司式司教による受階者選出の確認、訓話、役務と従順の約束など、簡潔明瞭に進められてゆく。参列者は誰もが助祭職や司祭職の尊さと責任の重大さが分かり、深く感じたことだろう。長い連願のあとに叙階本質の按手、聖別の祈りが感激的に行われ、神の恵みによって新助祭と新司祭が誕生した。新司祭は奉献の祈りから、司教と司祭団と共にはじめてのミサを捧げた。

すべてに感謝の祝賀会

式後、叙階祝賀会が岩手県信徒連絡協議会主催で、ホテル東日本で行われた。ベトレヘム宣教会地区の岩手県下信徒の熱意が反映したすばらしい催しとなった。佐藤司教やツーゲル管区長などのあいさつが続いたが、新司祭を直接指導した花巻教会主任ゲーヴィレル神父の話は感銘を与えた。一人の司祭の誕生には、どれほど多くの人の祈り、ぎせいがあることか。新司祭の家族に特に感謝とねぎらいの言葉を述べ、新司祭には慈父の思いやりを示して門出を祝った。司祭召命促進の秘けつを教えられる思いがした。

≪新司祭のプロフィール≫

板垣勤　35歳。昭和24年岩手県石鳥谷町に3人兄弟の長男として誕生。43年県立紫波高校卒、44～48年陸上自衛隊勤務。帰郷後にキリスト教を知り、50年花巻教会で受洗、この頃母に死別。ゲーヴィレル神父の指導で52年東京カトリック神学院に進む。昨年3月に助祭。現在家庭には祖父、父、2人の弟はそれぞれ家庭をもっている。

≪新司祭のひと言≫

いままでのあゆみを振りかえるとき、神の導きは不思議としかいいようがありません。司祭に叙階されたことに一番おどろいているのは家族でも友人でもなく、この私自身なのです。キリスト教との出会いは、ちょっとしたきっかけでしたが、そのための長い準備があったようです。ひとつひとつを考えれば、短い人生経験ではあるが、それらはみな有機的なつながりをもっているように感じられます。これからの私のあゆみも、同じ線上を導かれてゆきたいと思います。

司教日程（3月16日現在）

4月6日　ウルスラ学院職員始業ミサ（仙台）
12日　常任司教委員会（東京）
13日　神学院常任委員会（東京）
15日　受難の主日ミサ（元寺9時半）
18日　聖香油のミサ（元寺午後2時）
19日　主の晩餐（元寺午後6時半）
20日　主の受難（元寺午後6時半）
21日　復活徹夜祭（元寺午後7時）
23～25日　日本カトリック管区長協議会総会（東京）
5月5～11日　韓国巡礼

「贖いの特別聖年」閉幕へ

巡礼は、教会交流を促進

贖いの特別聖年は、いよいよ4月22日のご復活祭で終了する。この一年間、私たちは特別聖年のお恵みを、自分の信仰生活に活かすため、それぞれの努力をつづけてきた。

さる3月18日に開かれた教区司牧評議会総会で、各地区の評議員から特別聖年行事の実施状況について報告があった。最も行われた行事は、巡礼指定教会や殉教地への小教区単位の巡礼。またこれと関連して、隣接教会の訪問とか、複数教会信徒合同の行事が目立った。

これらは、特別聖年の信徒個人の全免償の恵みを受けるにとどまらず、教会共同体の一体感、交流の促進にも大きな力となった。そのあらわれはとくに、昨年6月29日のカテドラルにおける特別聖年司教ミサ、9月25日の青森市宣教百年県信徒大会の盛り上りとなったが、このほか各地区信徒大会や例年行われる後藤寿庵祭、仙台広瀬川殉教祭などの参加者の増加にも見られた。

私自身は、聖年に何をした？

特別聖年終了へ残された僅かの日時は、もう一度、贖いの特別聖年の意義を思い起し、自分自身の信仰生活にプラスとなる何かを身につけるため努力すべきだろう。佐藤千敬司教は特別聖年書簡（昨年3月発表）で、私たちの信仰生活に具体的なもう一つの実行を加えることをすすめている。「深い祈りと黙想にはげみ、誠実な心をもってゆるしの秘跡に与り、清められた心でミサに参加する」ことは、この四旬節の潔めの期間に、最もふさわしい実践課題である。

また、神のいつくしみを一層深く味わいながら、愛の業にはげもう。祈りと犠牲と献金が、私たちの生きた信仰と希望のあらわれにほかならない。

今年の四旬節「愛の運動」（献金）は、目標額七千万円。国内は老人福祉、心身障害者施設援助およびそれら支援活動への援助、在日インドシナ難民への援助。海外では地域開発、医療活動、青少年福祉に対する援助、を運動目標としている。

御礼

このたび仙台司教区司祭小野忠亮神父帰天に際し、教区内外多数の方がたから丁重なご弔問、ご弔電、ご香典を賜わりました。また仙台での葬儀ミサ、青森での追悼ミサにはご多忙のところご参列下さり、故人のためにお祈りいただきましたこと誠に有難うございました。

混雑に取りまぎれ不行届きもあるやに存じますが、故人に寄せられたご厚情に、改めて厚く御礼申し上げます。

昭和五十九年三月

仙台司教　佐藤千敬

教区司祭団一同

仙台教区司祭異動

（4月1日付）

司教総代理　斎藤　石雄（畳屋町教会主任兼任）

元寺小路教会主任　横島　健二（大湊教会主任）

元寺小路教会助任　板垣　勤（新　任）

東仙台教会主任　首藤　正義（白石教会主任）

塩釜教会主任　土井　文雄（元寺小路教会主任）

気仙沼教会主任　渡辺　彰宏（塩町教会助任）

大湊教会主任　土井　勝吾（気仙沼教会主任）

千厩教会主任　笹気　直哉（元寺小路教会助任）

特老・暁星園園長　三浦　平三（司教総代理）

弘前教会主任　ジャン・ギ・デュポン

本町教会主任　マルク・ラフォールト

一九八七年に仙台で教区大会

企画委員会発足きまる

教区創立50周年を迎える一九八七年（昭和62年）に、仙台市で教区大会を開催することが決まった。これは3月12日の司祭評議会、3月18日の司牧評議会にそれぞれの役員会から提案され、検討されたもの。

司牧評役員会が提案した教区大会案を叩き台として、両評議会で審議されたが、大会テーマや大会の進め方を基本的に練り直すべきだとの意見があり、司祭評では企画委員会の設置をのぞんだ。司牧評もこれを受けて、結局司牧評より信徒4人、司祭評より司祭2人それに教区事務所を加え、早急に企画委員会を設けて教区大会の具体案を作成することとした。

司牧評では各地区の評議員より、教区大会開催についての反応などの報告があったが、大会開催はほとんど賛成、また開催地を仙台にすることも特に反対はなかった。

なお佐藤司教から、3年間の司牧目標は今年で終るが、次の2年間の司牧目標を選び、その実施の努力、成果をふまえた大会にしたいと発言があった。これは単なる祝賀大会にせず、教区発展の足がかりにしたい意向を示したもので、両評議会とも了承した。

講師はラベル修道士

6月・仙台教区司祭研修会

ベトレヘム会が担当した今年の教区司祭研修会（隔年開催）は、6月25日午後より27日昼まで盛岡ホテル・カリーナで開かれる。今回のテーマは「家庭司牧」、講師にはラ・サール会のアンドレ・ラベル修道士が招かれた。同修道士はMBW（ベター・ワールド・ムーブメント）の日本における責任者、西アジアのコーディネーターとして活躍している。仙台教区には研修会指導などでなじみの方。

今年の寿庵祭　5月27日

講演　田中澄江さん

今年の寿庵祭（後藤寿庵大祈願祭）は、きたる5月27日午前9時30分から、水沢市福原の寿庵廟前で行われることに決った。今回は当日、作家の田中澄江さんが、「後藤寿庵が現代に遺した教訓」と題して話される。水沢教会では、各教会や団体が行事計画に予定されて、より多くの方々が参加されるようにのぞんでいる。

第三回　自然な家族計画（NFP）学習会

NFP第3回学習会は3月6日午前10時から、元寺小路教会信徒館で行われた。講師はシスター熊谷。約20人が参加、小さい子ども連れのお母さん方が目立った。テキストは「図説排卵法ービリングズ式受胎調節法」、今回は粘液法について具体的、明快な学習で、各自の観察記録を次回の宿題として12時に散会した。次回は4月22日午前10時より同所にお

韓国カトリック　二百周年　祝賀　巡礼団

教会創設二百周年を迎える韓国教会は、5月3日から7日まで、教皇ヨハネ・パウロ二世を迎え、百二人の殉教福者の列聖式を行います。日本教会も韓国教会の慶事を祝福し、公式の巡礼団を送ります。なお巡礼団には、佐藤千敬司教も同行の予定。

A－5月5日～8日（3泊4日）コース
九万七千円（東京発着）
B－5月5日～11日（6泊7日）コース
十三万一千円（東京発着）

お申込み・お問い合せは、
・カトリック中央協議会　三末神父
電話　03－262－三六九一（代）
・阪急交通社「VECカトリック巡礼団」
電話　03－775－五八五一

いて。多数ご参加下さい。

ヴィンセンシオ・マリア笹気直三氏

（元寺小路教会笹気直哉神父の父君）

3月19日午前11時40分、心不全で急逝。69歳。氏は青年時代にドミニコ会プリオット神父の指導を受け、佐藤直助氏の代父で洗礼を受けた。教区報「炬火」の編集・発行には家業の印刷業を通じて創刊より大きな貢献をされた。

葬儀ミサは22日午前10時30分より元寺小路教会にて、令息直哉神父の司式で行われた。

新教会法解説 ④

結婚についての改正点 (2)

安井 光雄神父

≪混宗婚の約束≫

日本では、カトリック以外の人と結婚するケースが多いが、これは混宗婚といわれる。混宗婚のときは、結婚前に、信者の人は主任司祭の所に行って、①信仰から離れる危険を除く心構えのあること②生まれてくる子供がカトリック教会の中で洗礼を受け、教育されるよう、できるだけの努力をすること、の二つを約束しなければならない。非カトリックの人は何も約束する必要はないが、カトリックの人のした約束を知っている旨報告しなければならない。また、結婚について両方とも話を聞かなければならないので、その時上述の話を聞くのが一番いいのではなかろうか。教会で結婚するのが原則であるが、重大な困難がある場合には教会から免除の許しをもらえるのは今までどおりである。

≪別居と結婚の無効≫

人間的弱さのために、または様々の事情から、夫婦が平和に暮らせなくなることがある。このような時、教会はまず和解するよう仕向ける。しかし和解が不可能と思われたら、別居した方がよい場合もあるし、あるいは別居しなければならないこともある。こういう時、教会に別居という法的手段で許可を願うことができる。それには、一時別居と永久別居の二種類がある。ただ、結婚の絆は残っているから再婚はできない。

教会では離婚はできないが、ある場合には解消できる。まず結婚無効宣言によるのがある。たとえば、①洗礼が無効であったり②無効障害があったり③結婚の合意に欠陥があったり④方式が全うされていなかったり⑤夫婦行為が完遂していなかったりすると無効になる。無効障害といわれるものは十二ある。

(1)年齢障害（まだ公になっていないが、日本では民法と同じく男十八・女十六歳未満）(2)性交不能障害(3)絆の障害（前婚の絆がある人は別の結婚ができない）(4)血族障害（直系血族と四親等内の傍系血族）(5)誘拐障害（誘拐した男性が自由状態にない誘拐された女性との結婚）(6)犯罪障害（結婚したい人の配偶者を殺すか自分の配偶者を殺す人の結婚）(7)姻族障害（直系姻族間の結婚）(8)公義障害（教会法上の無効な結婚または周知もしくは公の私通関係から生じた、関係ある相手の一親等内の直系血族との結婚）(9)養子縁組障害（法定の直系親族または傍系二親等内の親族間の結婚）(10)異宗障害（未受洗者との結婚）(11)叙階障害（助祭・司祭・司教の結婚）(12)誓願障害（貞潔の終生誓願を立てた人の結婚）がそれで、免除されないものもあるが、されるものについては、その免除を受けていなければ無効となる。

（つづく）

春秋

いま話題のものに、体外受精のことがある。牛や馬なら話題で終ろうが、人間はそうはゆかぬ。人間社会の倫理秩序に直接かかわってくるし、下手をするとその崩壊さえ招きかねないからである。

体外受精成功のテレビをみていて、とても気になることがあった。医師が当然のように医学の進歩、勝利と語っていたことだ。技術面ではそうだろうが、果して人間のための進歩なのか、なんとも釈然としない。まして子供に恵まれない人の為の福音だとは、あまりにも安易な発想ではないだろうか。倫理委員会を設けようという動きは、多くの人が疑問をいだいていることの裏付けである。

教会は遺伝子組み替えの問題なども含めて、極めて慎重だが、はっきり反対を表明する司教や神学者は多い。人間の領域を越えて、神の領域に踏みこむおそれを懸念するゆえである。

さる2月、アメリカ、ダラスで医学倫理の司教研修会があった。教理聖省長官ラッツィンガー枢機卿の基調講演は、「我々に出来るすべてが、なされるべきではない」が、オッセルバトーレ紙の見出しになっていた。人間社会に必要な倫理ということを、いい得て妙である。

（M）

追悼

葬儀ミサ弔辞

「さようなら 小野神父様」

気仙沼教会信徒会長 村上 隆蔵

気仙沼カトリック教会信徒会を代表して、小野神父様のご霊前に謹んでお別れのあいさつを申し上げます。神父様はご高齢にもかかわらずご年齢より若く見え、いつもお元気でおられたのに、スベルマン病院でご永眠なされたとの訃報をきき、ただただ驚くほかはありませんでした。神様のお計らいとは申せ、私ども信徒一同は神父様の温厚なお顔、お姿に再び接することができなくなり、誠に哀悼にたえないところです。

顧みますれば小野神父様はたしか、昭和16年に戦前の元寺小路教会聖堂で、レミュ司教様から叙階の秘跡を受けられ、私もその式典に参加いたし、当時のことがほうふつとして浮んできます。それから三十年後、昭和35年4月に気仙沼教会主任司祭として赴任してこられ、昭和50年10月に一関教会に転任なさるまで、実に十五年の長きにわたって私どもを教え導いて下さいました。

就任間もない頃、南半球から北半球に押し寄せてきたあの恐ろしいチリ津波の際には、率先して災害家族に救援物資を配り、またゼノ修道士と共に遠く志津川地方にまで足をのばしてご活躍なさいました。その愛の実践活動はいまだに印象深く残っています。神父様がまたカトリックの歴史研究家であられることはあまりにも有名ですが、気仙沼でも教会創立八十八年祭の折に、八十八年間の歴史を立派にまとめあげて下さいました。

思い出は数々ありますが、毎年信徒たちを引き連れて野や山にハイキングなさったことは、アルバムをひもとくごとに、とても楽しい思い出として記憶に残っています。

学者であられた神父様、柔かな感じのする円満な人柄の神父様、信者たちに慕われた神父様、もうふたたびお目にかかることはできません。すでに神様のみ前におられることと思います。

安らかに憩われんことを心からお祈りし、最後のお別れの言葉といたします。

ああ、永久保先生

平教会 中沢 渉

平教会のカテキスタ、マリア・モニカ永久保君枝先生は不慮の交通事故にあい、6日間の昏睡状態がつづいたまま、2月2日イエズス奉献の日に主のみ許に召されました。

昭和24年8月15日聖母被昇天の大祝日に受洗され、同26年6月から三十二年間、ひたすらカテキスタとしての務めを、神のみに仕えるものとして、しかも忠実従順に、主のみ栄えのため燃えつくされました。

先生のことについては、到底一口では語りきれませんが、二つのことだけにふれてみたいと思います。

その一つは信徒として霊的母なる聖母マリア様に対するあつい信心と信頼です。それはそれは熱心なロザリオの祈りを通して、私どもに示して下さいました。平教会は設立以来毎晩ロザリオの祈りがもたれていましたが、勤務やそれぞれの都合で仲々教会に集まれないため、三年前から各人が家庭で一致した意向で祈るロザリオ会を結成しました。先生は平教会から遠方に離れている信徒の方々にもお願いし、いまでは一致して祈る会員が60人を越えるほどにもなっています。

もう一つは、病人に対する深い思いやりです。福祉活動を最大の布教と考え、週の半分以上は献身的に病人訪問を行っていました。信徒の病人には神の愛にこたえる生き方をと希望を与えて力づけ、信仰をまだ持たない病人にも愛と苦しみを分かち合い、接する病人に大きな感化をおよぼしました。このようにして信仰にみちびかれた方や神の国に迎えられた方がたくさんいます。先生はそうした病人から姉や母と慕われ、病人の心の大きな慰めと支えとなっていました。この度の事故も病人訪問の途中のことでした。

明後年は平教会のグローロ神父様の司祭叙階金祝にあたるし、神父様と一緒に聖地巡礼にゆきたいと楽しみにしていた先生でした。聖母のご保護とみ手にすべてを託して、み旨のままに天に召された先生の永遠の安息をお祈りいたします。

おらが教会

(42)

岩手・千厩教会

おらが教会の庭には、桜が植えられています。桜の下に停めた車は花の散る頃、室根山を背景にまるで花車のようになります。

一関市から東へ、北上川を渡り室根の麓を通って、海岸の気仙沼市に至る国道二八四号線。その両市のちょうど中間、どちらからも26キロメートルの地点に千厩町があります。戸数約三千戸、人口約一万六千人、岩手県南、東磐井郡の中心で商業と農業の町です。千厩教会は町の中心、室根山を源流とする千厩川畔に建っています。

昭和26年、当時一関教会主任だったベトレヘム宣教会のガルトマン神父様は、東磐井郡下一円、千厩町や大東町沖田などで、役場や信者の家を宿にしながら宣教していました。そして昭和29年1月、千厩カトリック教会の聖堂、司祭館を建てられたのです。

千厩は磐井里といわれた一関地方に入ります。宣教活動がなされた戦後は、人心が荒廃し切った時期でした。人びとの本当の倖せを願って活動する宣教師の熱意に打たれ、近隣町村の心ある人びとが集ってきました。千厩教会の建設には、そうした神父様の話を聞いた町の有志の方たちの、大きな協力があったと聞いています。とにかく神のみ摂理で、東磐井郡に住むおよそ5万人の人のために、恵みの見えるしるしとして千厩教会が与えられたのです。

昭和36年1月には、千厩町から20キロ近くもある室根山麓の田茂木地区に、バウマン神父様の尽力で伝道館が建てられました。田茂木の信徒は自分たちの労力で、その土台を築きました。手で築いた玉石の土台は、今でも少しも損われていません。石の一つ一つが、一人ひとりの信仰の堅固さを示しているようです。歴代の神父様方が、一日がかりでみ教えを伝えにゆかれた熱意が、深い信仰に結びついているようです。

昭和40年4月、千厩教会の司牧はそれまでのベトレヘム宣教会から、教区司祭団に移管され、第五代主任司祭に三浦平三神父様を初めての日本人司祭として迎えました。それ以来、高瀬和夫神父様、高橋昌神父様、佐藤守也神父様が就任しました。現在は第九代主任司祭として、鷹觜達衛神父様が一関教会と兼任で来られています。

教会が誕生して三十年になりました。現在は主任司祭が一関教会と兼任なので、教会に司祭は常住していません。しかしふだんは付属の清心幼稚園の主任先生や教師方が、外部との連絡にあたってくれています。教会行事のお世話、渉外なども一手に引き受けて下さっており、教会活動の実際は幼稚園の先生方に負うところがほんとうに大きいです。千厩教会は平和な、母性的性格を示しています。

もちろん信徒も懸命です。設立当初から公務員の要職にあって、忙しい中にも献身的な協力をささげておられる方、日本一の菓子司を目指して、人々によろこびとたのしさをふりまいている方、教職や商工業に従事しておられる方。みな世にあって職場を通じ、かつて教えを受けた宣教師の熱烈な心意気に応えようと、社会で愛の実践に励んでいます。

主日のミサに与かる人は10人余りにすぎませんが、月の前半は仙台から平賀徹夫神父様が来て下さり、みんなで心を熱くしながら、キリストの平和を社会にと祈っています。とはいえ、創立30年という最も壮年期にあるべき教会も、委員の平均年齢は50歳を越えてしまいました。若さのしるしである行動性には欠けますが、集まると宣教師方の深い愛と教えを語り合って、その感謝の気持を実践で示そうと決意しています。

（細谷　力一）

【編集後記】

あれほどきびしかった寒さも、どうやら耐え切ったようだ。一足さきに机の上の水栽培ヒヤシンスが、ふくいくたる香りをまきちらしている。まだ春の雪はちらついているが、芽吹きは近い。

教区司祭の人事異動が発表になった。久しぶりに新任の司祭を迎え、前途に光明を見いだす思いがする。今回の異動で、教区報の編集責任者が交替する。ご協力いただいた各教会の皆さま方に、心から感謝申します。（M）